

D・F・オーウェン著（鈴木継美・他訳）『人類生態学入門』

白日社，1975年，vii+298ページ

1. 本書の著者は、スウェーデンのルント大学の昆虫生態学者であって、熱帯アフリカを舞台として人類生態学いいかえれば人間の生態学とは何かを具体的にあきらかにしようとした野心的力作である。訳者は人類生態学の専門家である東北大学医学部鈴木教授を中心としたグループである。翻訳とは思えないこなされた流ちょうな日本語で、一般に理解しがたい人類生態学が事実にもとづいて語られている。
2. 本書は次の11章から構成されている。第1章環境と人々，第2章人口，第3章アフリカの農村における生と死，第4章アフリカの都市における生と死，第5章農耕の生態学，第6章農耕に伴う雑草，有害動物，病気，第7章野生動物と家畜，第8章食物と栄養，第9章人間の病気，第10章自然淘汰と遺伝，第11章開発の生態学。
3. 著者が特に熱帯アフリカをとりあげたのは、著者の言葉によれば“地球上にこれまで起こった中でもっとも急激な環境変化が、この土地において進んでいると私には思えたからである”と語っている（5ページ）。私共の常識では、先進諸国においてこそ環境の変化がはげしいと思われるが、生態学的には熱帯アフリカであるという著者の知見は興味ある点である。日本人には縁の少ないアフリカについての著者の研究は、一般の読者に興味深いいくたの事実と知見を提供してくれる。たとえば、たん白質の摂取不足のためにおきる病気である「クワシオルコール」（ガーナ語で“赤い頭の少年”という意味）のことがしるされている（69，193～199ページ）。たん白質欠乏栄養失調のためにアフリカの子供達の髪の毛がしばしば金色がかった赤色に変わるのでこのように呼ばれているという。このような病気はその原因からして治療することは困難ではないが、アフリカ人はあるタブーを破った時にこの病気が生じると信じているため、栄養学的知識にもとづいた対策は効果がない。これは一例であるが、アフリカの子供の死亡率の改善や栄養の改善になお多くの困難な問題が残されており、治療や栄養問題が社会改革と不可分の関係にあることを示唆している。
4. 人類生態学とは何か、については著者がまえがきにおいてかんたんにふれ、「生態学は生物とその環境との関係を研究することができる。人類生態学は、それゆえに人間の環境に対する関係を検索するものである。」とのべているにすぎない。訳者の鈴木教授はこの点に着目され、「訳者まえがき」において（7ページにわたって）詳細に人類生態学の内容と現状を解説されており、この分野の専門家でない日本人の読者に本書の意義と位置が理解できるように努力されている。
5. 人類生態学が著者のいう如く人間の環境に対する関係である以上、人間集団としての人口の変化が重要な関心の対象となることは当然であるといえよう。特に人口の変化が異常にはげしくなった今日、人口とその生存のための環境との相互関係は重要な人間科学的課題である。著者・オーウェンもそのまえがきにおいて、人類の激増と有限の資源との関係を指摘し、またアフリカの著しい人口増加による現在の苦境を解決する方策は人口増加率の抑制と低開発国の経済開発を許す工業国側の施策であるといっている（279ページ）。出生と死亡は第3章，第4章の考察対象である。鈴木教授も指摘されている如く、出生、死亡と生活環境の関係ならびに地域間の人口移動の人口動態への影響も重要な課題になってくる。
6. 人類生態学が今日の人口増加や出生、死亡、移動を操作の変数と考えているとすれば、それは Demographic Ecology であるともいえるし、また人口の生態学的側面の研究を重視すれば、それは Ecological Demography とさえいえるであろう。ここに少なくとも Human Ecology と Demography との基本的な関係があるように思われる。

（内野澄子）